

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 社会学 研究科 社会学 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程2年	筒井 久美子 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	社会学部教授	奥村 隆 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	物語喪失時代の生き方戦略——オウム真理教と「復興」		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程2年	筒井 久美子	
研究期間	2011 年度		
研究経費	134 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

物語を共有すべしという圧力が減退した現代社会に生きる人々にとって、物語の抑圧性よりも物語がもたらす安定性の欠如こそが問題として立ち現われる。このような状況に対して、先行研究では、物語を求めない戦略と物語を求める戦略とがあることが指摘されてきた。しかし、前者についてはその不可能性が、後者については暴力へ結びついてしまうことが明らかにされている。では、このアンビバレントを乗り越えるためにはどのような戦略があり得るのか。東日本大震災を受けて、多くの人々が災害ボランティアへ参加した。この現象が意味するところは、物語喪失の時代に、「復興」という「価値ある終結」をめぐる物語が立ちあがったということではないか。そこで、災害ボランティア活動への参与観察およびそれへ関わった人々へのライフストーリー・インタビューを通して、この物語を明らかにし、その魅力と危険性を明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[物語] [災害ボランティア] [生き方戦略]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**■ 問い**

本研究の問いは次のようなものであった。かつてのアイデンティティ論は、物語の抑圧性を問題として、そこからの自由を求めて、物語を相対化する研究を進めてきた。ここでいう物語とは「価値ある終結へと関連づけられている出来事の連なり」(大澤真幸 2011: 26)である。しかし近年、社会からの物語を共有すべしという圧力が低下し、そこで生きる人々にとっては、物語の抑圧性よりも物語が与えていた生きる意味の欠如が問題として浮上している。そこで、物語を求めない戦略や新たな物語を求める戦略について研究が進められている。しかし、物語を求めない戦略についてはその不可能性が、逆に、物語を求める戦略については、その戦略が大きな暴力に結びついてしまうことが指摘されている。では、このアンビバレントな状況をどのように打開することができるのだろうか。

■ 対象

この問題に迫るべく、本研究で着目したのが東日本大震災により発生した災害ボランティア活動である。全国社会福祉協議会によれば、震災後 2011 年 10 月までに各市町村に設置された災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数は、岩手県・宮城県・福島県合計で 920,900 人に上る。災害ボランティアセンターを経由せずに活動した人も多数にのぼるため、その数はさらに増えると考えられる。

この現象は、大震災によって「復興」という「価値ある終結」が提起されたということを示しているのではないだろうか。つまり、物語を喪失していた人々に対して、物語が与えられたということなのではないか。だからこそ、まるで高度経済成長期のように「私には何ができるのか」という問いを突き付けられ、その回答として災害ボランティアへ参加したのだと考えられるのではないか。しかし、このような物語はときに大きな暴力に結びついてしまうことを私たちの歴史は語っている。そうであるならば、この物語の魅力と危険性とを明らかにすることが必要なのではないか。

■ 申請当初の計画の変更

なお、計画段階では、本研究を大きく 2 段階に分けていた。第 1 段階は、オウム真理教の信者による一連の事件を題材にして、物語を求める戦略の失敗の仕方を明らかにすること、第 2 段階は、1 段階目の知見をもとに、現在、東日本大震災をきっかけに立ち上がりつつある「復興」をめぐる物語について、この物語が私たちに何をもたらすのかを明らかにすることであった。そして、本年度は第 1 段階から取り組むとしていた。しかし、目の前に生起している出来事をよそ目に、過去の出来事を追う必要性はないと考え、計画を変更して目の前の出来事に関わっていくことにした。

■ 先行研究

これまでの災害ボランティア活動については、本稿のような視点から対象としている研究は見られない。例えば、西山(2007)では、先行研究を「集合行動論的アプローチ」「組織論的アプローチ」「市民社会論的アプローチ」「相互関係論・支援論的アプローチ」の 4 つに分類している。

近接する研究としては災害の「魅力」について言及している B.ラファエル(1986=1995)の研究が挙げられる。災害にともなう死傷と破壊は、「比類ないほど恐るべきものではあるが、同時に魅力的でもある」。例えば、人々は「怖いものを安全な距離を置いてじかに見ようとして」、災害現場に押し寄せる。なぜなら、そうすることで「一種の代償的な死の克服という意味をもつ」(Raphael 1986=1995: 46)、また、「人間心理の『攻撃性(相手に敵対し破壊的な行動をする傾向)』」を空想という形で代償的に満たすことができる」(Raphael 1986=1995: 46)からである。また、災害は「直接影響を受けた人たち」だけでなく「救援に駆けつけた人たち」に「覚醒」と「興奮」をもたらすという。そのため、「災害に関与すること、とくに救援の役割に関与することが、おそらく日常生活上の何事にもまして重要であり、やりがいがあることのように感じられるのである」(Raphael 1986=1995: 47)。さらに「災害の救援という状況は、ある特殊な関与感と興奮、それに比

研究成果の概要 つづき

べると日常の仕事など色褪せてしまうほどの「高揚感」をもたらすことが多いという (Raphael 1986=1995: 353-354)。

ラファエルの研究は、災害の「魅力」について言及している点で重要である。しかし、人々が生きる意味を獲得する物語という視点を持っていない。

■ 方法

そこで、災害ボランティア活動現場でのフィールドワーク、それに並行して、災害ボランティア活動に関わった人々へのライフストーリー・インタビューを行った(継続中)。前者についてはこれまで、現地支援・後方支援それぞれについて 3 つの団体等に参加して活動を行いつつ観察をし、また、ミーティングや報告会・交流会等にも参与観察を行い、フィールドノーツに記録している。後者については、これらの活動を通して知り合った方からスノーボールサンプリングで調査を継続しており、現時点では 10 名の方に話を伺った。

■ 現時点で明らかになったこと

災害ボランティアに参加した人々は、その経験をどのように語ったのだろうか。ここでは研究経過を記載しておく。インタビュー対象者のうち 6 名は、この経験を自分というものと関わらせて語っていた。

1 つの極となるのが、「自分は何者であるかを再確認」する語りである。A さん(20 代前半男性)は、自分は「現地(被災地での支援活動)にこだわっていない」ということを繰り返し語る。なぜなら、自分が被災地で行っていることも、非被災地で行っていることも、さらには、震災前に行っていたことも「自分の中では変わってないと思っ」ているからである。

他方の極となるのが、「今までの自分とは異なる自分」という語りである。大学院生である B さん(20 代後半男性)は、大学院生という外からの承認を得にくい位置づけにあることに加え、論文執筆が行き詰まることでその中からの承認を得にくい状態におかれている。そこからの脱出の方向性として被災地での活動は語られる。そこでは自分がやれる範囲を超えた活動を行った自分がいたことが語られている。

少なくともこれらの語りは、大震災によって「復興」という「価値ある終結」をもつ大きな物語が提起されたということを示してはいない。新たな物語の提起というよりも、これまで自己が生きてきた小さな物語の確認や書き換えとして震災は語られているという印象を受ける。しかし断定するにはまだデータが不足していることは否めないだろう。

また、大震災がもたらした物語は早くも衰退している。例えば、ボランティア数はゴールデンウィークや夏季休業を経るごとに激減し、現地で活動していた団体等も活動を終了し撤退したところもある。本研究の文脈に置き換えれば、このことは、震災直後に共有された物語が人々を魅了する力がなくなってきていることを示しているのではないか。大震災により被害を受けた人々が支援を必要としている現状を踏まえれば、物語がもたらす暴力性ととともに問題とされるべきなのは、人々を動員する物語をどう語りついでいくかということなのかもしれない。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学内研究会での報告

2012年3月3日、社会学研究科院生例会にて研究経過を報告した。